

## 総研大・国際シンポジウム「アジア地域における学術文化交流ネットワーク」

平成 17 年度の総研大国際シンポジウム「アジア地域における学術文化交流ネットワーク～多様な文化と分野との出会い～」は、2006 年 1 月 20 日から 23 日までの 4 日間、総合研究大学院大学葉山キャンパスで開催された。主にアジア地域からの総研大修了生や、総研大の基盤である共同研究機関の教員、学生など約 140 人が参加し、多様な専門分野からの発表とともに、アジア地域のネットワーク構築に向けて活発な議論を展開した。第 1 日目の夜のレセプションで参加者が顔を合わせた後、2 日目から実質的な議論が行われた。五つのセッションの後、最後にパネルディスカッションが開かれ、それまでの議論を総括した。また、2 日目の夜にポスターセッションも設けられた。

第 1 セッションは「アジア地域における学術文化交流ネットワークの事例」として、総研大の各研究機関で行われているアジア地域での学術ネットワークについて報告があった。分野は、加速器科学、遺伝学、情報学、核融合科学、天文科学、比較文化学、分子科学など多岐にわたった。

第 2 セッションはゲストによる特別講演。21 世紀政策研究所理事長の田中直毅氏、台湾中央研究院総裁の李遠哲氏（1986 年のノーベル化学賞受賞者）、人間文化研究機構・機構長の石井米雄氏が、アジアについて高い視点で講演を行った。李総裁は、「ひとつのコミュニティ われわれの未来」と題して、人類が直面している二つの大きな課題—人口問題と国家間や各社会の中の格差の問題—を指摘し、この課題を克服するためには、お互いのよりよいコミュニケーションと、おのおのの違いを認め合う知性が必要だとし、科学者の果たすべき役割を説いた。

3 日目の第 3 セッションでは、総研大修了生 11 人が、日本で受けた教育や、その

後の自分の研究について発表を行った。

第 4 セッションでは、アジア地域が協力して取り組むべき課題として環境問題を取りあげ、4 人の専門家が話題を提供した。その夜の分科会では、修了生・留学生のネットワークなどについて意見交換が行われた。

最終日午前中の第 5 セッションでは、「ネットワークの体制構築に向けて」、各分野から発表を行った。

そして最後のパネルディスカッションでは、総研大の今後の取り組みについて、小平学長司会のもと活発な議論が展開された。まず、総研大副学長の高畑尚之氏が前日の夜に行った留学生とのミーティングの報告を行い、続いて国際日本文化研究センターの劉建輝氏が、自身の留学体験と、その後中国と日本で教えてきた経験をふまえ、▽留学生が日本社会に充分入ることができるような受け入れ態勢、▽留学経験者が主体になる横断的なネットワークの創設—などの提案をした。

その後、総研大が実施している海外レクチャーやアジア冬の学校などの紹介と

もに、研究機関が行っているアジアでの連携事業についても紹介があった。会場からの意見や具体的な提案もあり、今後のネットワークづくりにおいて検討すべき課題が明らかにされた。

台湾中央研究院の李総裁は全講演を聴いた後、アジア地区の学生や若手研究者の学術交流や広い意味での教育において総研大が果たせるであろう役割や期待を述べ、それが 4 日間に及ぶシンポジウムの総括となった。

本シンポジウムの実施委員長である池村淑道教授は、「総研大の各基盤機関は日本の基礎学術のセンターとしてアジアでのネットワークを持っていますが、これを学問分野の枠を超えたアジアの学術ネットワークとして発展させることが重要です。それには総研大の教員・修了生・在学生のネットワークを大いに活用できると思います。これは他の大学や機関では難しいことで、総研大の意義につながるものです。このシンポジウムはそのための第一歩として意義のあるものでした」と語った。



台湾の李遠哲氏



### Chaoyuan Zhu

朱超原

現職：台湾国立交通大学（台湾）助教授  
専攻と研究テーマ：機能分子科学専攻 理論化学物理

シンポジウムの話があったとき、参加しようかどうか迷いました。でも、こういう機会があってよかったと思います。ここに戻っている人々に会えるのはいいことです」

一方、全恩珠さんは、「普通の学術的なシンポジウムと違うので、どういうスライドを用意していったらいいか迷いました」と打ち明ける。また、ハーン・ラムさんのように、「せっかく日本に来るのだから、研究についてもっと学ぶ場があればよかった」と話す人もいた。

総研大の名前は日本国内でもあまり知られていないので、ネットワークを強化することで、より多くの人々が名前を知ることになるのではないかとという声も多く聞かれた。「総研大は、PhD取得のモデル校です。もっと多くの人に知ってもらうことはとても大切だと思います」と全恩珠さん。

米国で仕事をしている劉振林さんも同意見だ。「総研大の名前はあまり知られていないので、このようにネットワークを作るのはいいことだと思います。それに、ここの修了生はいろんな分野で活躍しているので、とても興味深い」

がかかります。総研大の修了生は多分野の最先端で活躍している人が多いので、彼らの研究論文など、インターネットですぐ入手できるようになればいいかもしれません」

邵仁忠さんも、「少なくとも、電子メールアドレスのリストを共有したい」と希望する。

アジア地域、特に日本と中国や韓国との連携について、示唆に富む意見を述べたのは、Jian Nan Cao（曹建南）さんだ。地域文化学専攻で、大阪の国立民族学博物館で91年から96年まで学んだ。現在は、上海師範大学社会科学部の副教授として、日本語や日本文化などを教えている。ここ8年間、駒沢大学の教授と共同で漢民族のシャーマニズムについての研究を行っているが、中国の人は日本の研究者が中国について調べていることに不信感を持っているという。

「中国人は、日本人がお金をかけて中国のことを調べるのは、それが侵略のためなのではないかと考えるのです。このような誤解を解くためにも、われわれの学術研究のことをもっと知ってもらう必要があると思います。これはどの分野についてもいえるのではないですか」

### Jian Nan Cao

曹建南

現職：上海師範大学（中国）社会科学部副教授  
専攻と研究テーマ：地域文化学専攻

